

# 断章 旭川のアイヌ語 地名研究

66

高橋 基

旭川のカムイコタンの鬼神あるいは魔神といわれたニツネカムイと、文化神サマイクルの壮大な伝説の発端のテシ(Teshi 岩梁)について、最初に記録したのは、明治二十三年に上川を調査した永田方正である。掲載地図の①の石狩川の川中の地名解を再掲する。

①【川中】テシ(Teshi 岩梁)―川中に数十の大岩乱立して殆んど梁の如し。故に名くアイヌ云、鬼神岩を以て梁となし、此河水を止む。神あり鬼を殺し梁を毀ち、水を通流せしむと

【註・永田の表記は「テシ teshi」】写真の「テシ現況」は、右岸から上流に向かって撮影したものの。左岸の背後に見えるのが、「岩見大橋」で、国道十二号線を四車線にするために作られた一キロメートル余の棧道橋で、このためすっかり景観が変わった。

掲載図の左岸の神居第五線川は、明治三十年製版『北海道複製五万分一図』

では、テシヤオマナイとなっていて、この川に架かる橋の名がこのテシを見る絶好の場所の意味で「岩見橋」と名付けられていた。永田方正は次のように地名解をしている。

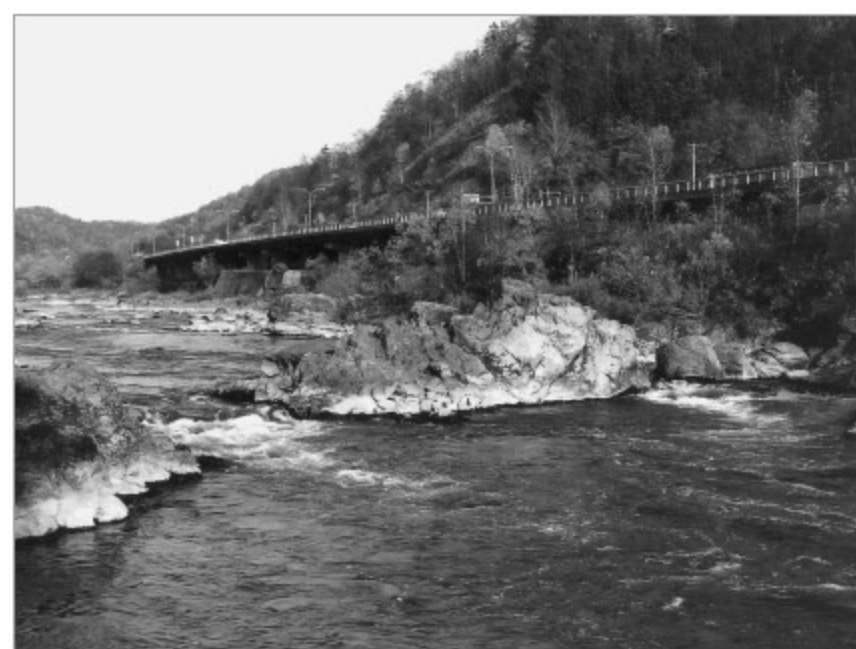
「テシヤオマナイ(tesya-oma-ni 岩梁に登る川)―岩梁の在る処へ流れ入る川なれば名く。(川向にも同名の川あり【註・江丹別第八線川】。此川の橋を岩見橋と云ふ」

さて、安政四年(一八五七年)に踏査した松浦武四郎は、③「鬼の足跡」や「鬼の首」では、伝説を記述しているが、その伝説の端緒となったこのテシでは、一切触れていない。写真のように、野

## ―旭川のカムイコタン②③―

帳の『巴第二番』に、「テシホ」とスケッチを描いているのである。

また、武四郎は、幕府への報文日誌の「再掲石狩日誌」では、頭注に野帳のスケッチ



「テシ現況」



『巴第二番』テシホ

の滝を強調した絵を描いた上で、「テツシーテツシと云は魚を留る具也。其が岩にて出来たりと云事也。其間大滝に成たり」と、淡々とした筆致で結んでいる。

増水した時に、このテシを間近で見ると、恐怖を感じるほどである。杉村満エカシによると、このテシは、洪水防止対策で、一部を爆破したとのことである。松浦武四郎のスケッチが元来のテシの姿であったのであろう。

前号の予告のように、天塩川にも有名なテシがあり、こちらの方は、天塩川の川名の由来となったといわれるテシである。しかも、伝説の基本部分は、両

者共通しているのである。現在は、美深町の「森林公園びふかアイランド」の古川の部分となっている。

文化四年(一八〇七年)に、利尻・礼文の巡見の帰途、天塩から天塩川を



遡った近藤重蔵は、後にテシと言われこの場所で、次のように貴重な判官(源義経)伝説を記録している。

「ベシバルポツプー古、此邊鬼住居シ、魚上ラザルヤウニセシヲ、判官来リ玉ヒ、毀シ玉フト云【註・読点は筆者が付した】

近藤重蔵の五十年後に、同じ場所で、松浦武四郎は、報文日誌の「天之穂日誌」で、天塩川の名の「テツシホ(天塩)」は、こここのテツシから起こったと次のように記している。

「テツシ―此処両岸平山なるが、大岩両方より出来りテツシの形に成りたり。むかし鬼神が作りしと云り。此川の惣名テツシホは此処より起りし名と言へり」

天塩川のテシは、名寄の伝承者の北風磯吉翁は、「普通は見えないが、川水が減水すると並んで見える(『アイヌ伝説集』)と述べている。筆者は、アイヌ語地名研究家の山田秀三氏の指示を受けて、このテシを股までの長靴を履いて、実際に横切ってみた。北風磯吉翁のいう川水が減水した状況でもあり、岩の上を歩いて渡ることが出来たのであった。同じ伝説を持ちながら、荒々しい石狩川とは全く違うのどかな景観であった。

(アイヌ語地名研究会幹事)  
※毎月第1週号に掲載します